

# 津藩史稿 第四卷

## 凡例

翻刻にあたっては、原史料の意味を損なわない程度に、以下のように取り扱っています。

- ・段落はなるべくそのまま再現するようにしましたが、改行位置は必ずしも原史料とは一致していません。
- ・漢字は原則として常用漢字を使用することとし、旧字などの異体字についてもなるべく標準的な字体に改めています。
- ・変体仮名や合字は平仮名に改めましたが、主に引用文中で助詞に用いられている漢字は原文のまま表記しています。
- ・誤字・当て字は原則としてそのままとしています。
- ・書き損じと思われる箇所は■とし、「(ママ)」を付しています。
- ・判読できない文字は□もしくは「」で表記しています。
- ・欄外等に記された補足は文字のサイズを小さくして表記しています。
- ・図については省略しました。

翻刻および注の作成にあたっては、以下の資料を参考にしました。

- ・『藤堂姓諸家等家譜集』林泉／編著 林泉 一九八四
- ・『公室年譜略』上野市古文獻刊行会／編 清文堂出版 二〇〇二
- ・『藤堂高虎家臣辞典 増補』佐伯朗／編 「佐伯朗」 二〇一三
- ・『漢和中辞典』貝塚 茂樹ほか／編 角川書店 一九七八
- ・『字典かな 改訂版』笠間影印叢刊行会／編 笠間書院 一九八五
- ・『くずし字用例辞典』児玉 幸多／編 東京堂出版 一九九三
- ・『日本国語大辞典』小学館国語辞典編集部／編 小学館 二〇〇〇―二〇〇二
- ・『新漢語林』鎌田 正, 米山 寅太郎／著 大修館書店 二〇〇四
- ・『大辞林 第三版』松村 明, 三省堂編修所／編 三省堂 二〇〇六

目次

第十七節

大阪冬陣

## 第十七節 大阪冬陣

大阪を如何に処分すべき乎は前將軍家康が晩年の難問題として、日夜に焦慮せし所なり。而も駿府に邸宅を営みて屢淹留し、常に家康に親近して経綸上の謀議に参画せし高虎が、如何なる程度に迄此の機密問題に参与せしかは、之れを証明する記録の一も存するものなれば、到底明記し得る限りにあらず。されど江州の井伊と相駢んで、大阪城に対する第一線の要鎮たる伊賀伊勢の高虎が、家康の対大阪策に付ての純然たる門外漢たるべき道理

なきは明白なり。とはいへ爆破の点火機たり

一 言いわけ。申し開き。弁解。

し大仏の落成を報告すへく、片桐且元が駿

(ママ)

■ 府に到着せし慶長十九年五月三日の頃は、

高虎は江戸城助工の為に江戸に滞在中にして、之れと何の関係をも有せず。爾後鐘銘問題が漸く険悪化して、家康が大仏開眼及堂供養の中止を命じたる七月廿六日にも、且元が  
一 弁疏 の為め僧清韓を拉へて駿府に來りし八月十九日にも、高虎は尚江戸に在りて、亦表面上には何の関係を有せず。其後八月中旬に及んで大阪城中諸国の浪士を招募し、兵備を修むとの警報至りしが、高虎は之れよりも少

しく以前、同月初旬に於て、板島城を管せる  
新七良勝に内命を伝へて、門三ヶ所、櫓十一  
ヶ所を造り、其他の破損をも修繕して兵器を  
蓄へしめ、且重立ちたる郷士十人を結束して  
戦備を整へしめたり。而して又伊賀上野にて  
も忍の者服部正左衛門、貝野孫兵衛、山本喜  
太郎等十人を任用したるは其の頃の事なりと  
伝へらる。そは蓋し胸中窃に期する所ありし  
なるべし。降つて十月朔日付崇伝長老の高虎  
に送りし内報書に、

今度被仰出儀に付而大阪本丸衆と片市正  
と出入之由候様子により大御所様従<sub>レ</sub>是

可被成御上洛との御内証に候 為御心得

申入候

とあるは、大蔵卿局の復命と齟齬したる且元の恭順説が、淀君の親近者に容れられずして、且元が大阪城を退去せし時の事態に付ての情報なるが、高虎と特に懇親にして鐘銘事件に家康の参謀たりし崇伝が、此の以前にも屢々内報書を高虎に送り居しことを推察し得べし。此の書簡の文面が第一回通信文にあらさることは、何人と雖も容易に推断し得る所にして、高虎は身江戸に在りしにも拘らず、事件経過の概要に付ては、当初より瞭然明知し居たる

ことを察すべし。其の翌二日付の本多正純の手簡に云く、

一書令申候扱大阪にそうせつ雑説有之に付而貴殿御事早々御上り被成候やうにと思召御飛脚にて江戸へ申上候早々御上可有と存候さしたる儀にては無之候間可被御心安思候かたきりいちのかみは大きか本丸にてはらをきらせ可有之由候処にすいれう仕候て煩候由申候てやとにい居被申候おつたのちつやしきへ人数入せむべきよしに候へともいちのかみ人数多有之に付而せめ候儀なり兼秀頼のぢ自筆の

ふみ又御くろよりのふみなどをいちのか  
み所へこし候て大きかの志ほき仕置はいち  
のかみ次第のよし被申由候今度の仕やう  
は大のしゆりとうとり頭取になり仕出し候  
由二候又うらく有樂子の左問も大きかへ出  
合候よし申候いまた志かとの儀申口不分  
候間志れ不申候とく早々御上り可被成候  
其内に可申上候恐々謹言

十月二日 正純 花押

藤いづみ様

大御所様今度の仕合を御きゝ被成大かた



もなく御わかやき被成候間可為満足候方々への御仕置一段とはかまいりらちのあきたる儀と存候か様の儀御すきのみちと申又急させられ候儀に御座候へハ何もかも乍恐よきと存斗存するばかりニ候××貴殿様早々御越候て思召の通御申上可被成候何れノ、其内に可申上候又申候上様 □は？ちと

御

きあいあしく御座候つるが大きさかの仕合を御き、被成てよりすきノ、とよく御なり被存候成？さてノ、きとくなる御事と存

候

又さいせう様も今月五日に尾州なこやへ  
御往被成候なに事もそれほとにはかとり  
候まゝ御まんそく可被成候貴殿御一人の  
御まんそくとすいれう申事二候御床しく  
奉存斗何事もはやく御めにかゝり申度候  
いそき御上り被成候ノ大御所様御まち  
かね可被成候間御いそき被成候又申候今  
度はさとのかみに切々の御心付忝奉存斗  
恐々謹言

十月二日 正純 花押

藤いつみ様

これも亦前数回に往復ありしことを推察し得らる。斯くて家康は此の前日即ち朔日に、將軍秀忠に大阪討伐を告ぐるの書を発せしが、高虎は之れより先き、屢秀忠の密議に参し居たるが、茲に至つて築城工事を中止し、直に西上すべきの命を受けたれば、助工に従事せる弓銃隊士に速に歸藩して後命を俟つべしと令し、自らは数騎を随へて四日に竜口邸を發し、六日に駿府に着して家康に見え、軍議に参すること二日間なりき。既にして大和の大小名を督して先鋒たるへき命を受け、八日駿府を出発して藩国に向ふ。

…同年九月の末より度々高山様御登城  
なされ候ひき是は御陣の談合被遊たる由  
に御座候 十月三日御登城被成御談合の  
上にて御陣相極り申由にて高山様御帰宅  
被成御家中衆へも被仰聞鉄砲を御取出さ  
せ玉葉御こませ翌日十月四日の未明に御  
手廻りましてにて江戸を御立被成候 但三  
斎小筒まで御座候ひき路次中は鉄砲も跡  
先になり御供不仕候ひき 駿府へ三日ふ  
りに御着被成候 駿府に中二日御逗留被  
成候其内両日共に御登城被成御談合御座  
候由と相聞え申候 駿府に御逗留被成候

内に江戸に残り申候御家中衆追々参府仕候  
西国御大名衆も追々御暇御のぼりの

由に御座候ひき  
(西島留書)

十一日津城に着して大阪討伐を発表し、衆士を斥け、寢室に入りて自ら出師計画を作製し、秘書西島之友をして之れを書せしめて、各一通を左右先鋒に与ふ。其の重もなる氏名左の如し。

二万石 左先手 渡辺勘兵衛

一万石 与力共右先手  
外二侍組有之 藤堂仁右衛門

五千石 侍組有之 藤堂新七郎

二万石 藤堂宮内

一万石 与力共 藤堂出雲

三千石 藤堂内匠

五千石 藤堂玄蕃

五千石 菅平右衛門

二千五百石 外に土佐組あり 桑名弥次兵衛

二千石 外に侍組あり 渡辺内膳

五千石 浅井左馬

四千石 佐伯権之助

三千五百石 外に侍組あり 藤堂采女

三千石 右同断 藤堂主膳

二千五百石 右同断 福永弥五右衛門

二千石 右同断但病氣にて嫡子与一郎出陣 藤堂作兵衛

二千石 馬乘弓廿人  
かち弓三十人

藤堂勘解由

二千石 侍組并  
鉄砲

藤堂式部

二千石 右同断

藤堂右京

二千石

藤堂三郎兵衛

二千石

矢倉大右衛門

二千石

牧野齊

黒母衣

千石

沢田但馬

千石

阪井与右工門

千石

磯野右近

千石

藤掛勘十郎

千石

野崎新平

千石

野依清右工門

千石

赤井忠右工門

八百石

粟屋伝右衛門

七百石

小川五郎兵衛

七百石

角田木祐

〆拾人

赤母衣

二千石

藤堂主殿

千石

堀伊織

千石

大津伝十郎

千石

柏原新兵衛

千石

友田左近右衛門



千石

渡辺作左衛門

千石

古田内蔵之介

七百石

落合左近

七百石

山田甚右衛門

七百石

津田数馬

四百石

杉山左門

ノ 拾一人

鉄砲頭  
津附

千五百石

中村源左衛門

千石

村井総兵衛

千石

白井九兵衛

千石

吉田貞右工門

五百石  
内海六郎左工門

五百石  
米村弥五兵衛

四百石  
奥山五郎左工門

四百石  
竹中三郎兵衛

四百石  
宮部源兵衛

伊賀附

千石  
梅原勝右衛門

千石  
宿毛甚左工門

千石  
赤沢ふぢ右衛門

七百石  
苗村石見

六百石  
須知孫左衛門

五百石  
青木忠兵衛

四百石 松原十右衛門

四百石 栗田清左エ門

四百石 菊川源太郎

〆拾八人

此外組外、組付、小小姓、大小姓等馬上六百

騎馬乗四千石取以上  
五百石に一騎つゝ、総員六千余人を動員し、幟は

紺地に白丸三個、大馬印は地白三幅の四半に

朱の丸、小馬印は金の笠出し黒鳥毛、藩士の

番さし物は二幅の四半、地紺に白丸、甲の前

立に金の日の丸を附し、小小姓には甲の後建

物に金の切りさきを附し、猩々緋の袖無し羽

織を着せしむ。持筒組指物は白志なひ二本、

総足輕指物亦同し。幟一本、藩士の幟五十二本、銃七百六十挺、同予備七十五挺、弓及長柄若干、赤母衣は秀忠の使番と同様なるを以て、避けて赤志なひとし、黒母衣をも黒志なひに改む。足輕の具足は革製にして、仕寄の時に限り着せしめたりといふも、一説には仕寄の際着甲すれば屈伸自在ならずして操銃不便なれば、だんだら筋の胴服、金の桃形兜に烏毛の引廻しを附したるを被むらしむとあり。又一説には、足輕一組二十人の内、半数は着甲、半数は胴服、其の革具足とは皮革製にあ

らずして、粗製の鉄甲なりと。此の三説孰れか真なるを知りがたし。

封境留護の配員を定むること次の如し。

津城代

千石 周参見主馬 鉄砲組二十人

同 山崎善右衛門 同

奉行

五百石 赤尾久右衛門 同心組二十人

横田藤右エ門

代官

百石 中村角内

夫人護衛

五百石 淵本長助

百々又兵衛

蔵預

二百石 村瀬市兵衛

台所頭

二百石 井上助右衛門

此外知行取保田閑齋 梅原竹雲 柳田宗

悦 高木藤右工門 中根与兵衛 岡本権

内 広瀬四郎右工門 江村彦左工門 切

米取十六名

上野城代

千五百石 藤堂孫八郎

今井治齋

五百石加り 小野半左衛門

奉行

千石 石田清兵衛 同心組二十人

中小路五郎右工門 同

代官

岸田莊右衛門

角地嘉右衛門

屋敷番頭

六百石 高田伝兵衛 鉄砲組二十人

二百石加り 渡辺高之助

百五十石同 居相孫作

屋敷番 宇野少助 切米取

此外知行取木野木甚内 切米取九人

名張城代

五百石 高橋甚内

鉄砲組二十人、藤堂  
出雲出陣に付代務す

代官

和田真齋

壬生太郎助

乙女五郎助

京屋敷留守居

川瀬次兵衛

伊予預所

藤堂新七郎駐在宇和島の守  
備員にして今治にあらず

北島縫殿助



二百石 美馬蔵人

五百石 田中林齋

二百石 林伝右衛門

十月十三日、高虎は津兵を率ゐて長野越を上野城に着し、滞在二日、諸事を指揮し、十六日伊賀兵を併せ率ゐて同地を出発し、其の夜有市村笠置に協坂安治宿せし故にに宿し、十七日木津に着し、茲に宿陣して家康の上洛を待てり。家康が十一日を以て駿府を出発あるへきこと、大阪城に真田左衛門の入城せしこと等は、十四日桑名発の金地院崇伝の書によりて、高虎は上野

城に於て既に之れを知れり。此時兵器、糧食の伊賀に在るは、笠置より森島新右衛門の手によりて木津川を下し、津城に在りしは船奉行松本雅樂、内田三郎左衛門等によりて、海路大阪に輸送せりと云ふ。十八日金地院崇伝の書至り、十七日家康名古屋に着し、廿一日若くは廿二日入洛の日取なることを報す。十九日宮内少輔高吉、士卒八百人を率ゐて今治より来り合す。廿二日高虎軍令を馬廻の士に発す。

## 覚

一先そなへ右左中三そなへを一手に行儀

にておし可申候事

一 一番弓鉄砲二のほり三小さし物四鎗五

甲懸六ほろ七馬上其跡はさみ箱其外色

々の道具持可申候事

一 人数たて候時は右左書付の如くたるへ

く候但のほりのきわに何も小さし物弓

鉄砲迄先に立可申事

一 のほり小さし物如申付候弥そろへ可申

候事

一 甲のたて物是又きさし物日の丸たて可

申候是は今初而申出儀にて無之候間油

断の輩は過錢可有之候事

一鉄砲の者胴服不足の分は頓て可相渡候  
間書付可越候事

一右左のそなへ弓鉄砲諸道具弥改馬数等  
是又組々書付之通役付馬上の弓はうつ  
ほを馬の上につけ可申候何も由断有間  
敷者也

十月廿二日 和泉守 判

馬廻侍中

二十三日、家康京都に着す、高虎手廻の士を  
随へて上京し之を迎ふ。家康は高虎と片桐且  
元とを召し、地図に就き城濠の深浅に因り、  
攻撃の方面を議せしむ。翌廿四日家康高虎の

攻城方略を問ひしに、高虎答へて曰く、城兵

(ママ)

■ を誘出し、其の後に尾して城に入らんと。

家康之を領く日本戦史  
関原役廿五日本津に帰り、二十六

日諸軍に先たちて、立田越を河内の国府に至る。家康の軍目付真田隠岐守、城織部等七人同行す。大和の諸将も漸く来り会せり。廿七日河内の小山に到りて放火し、敵況を視察して国府に帰る。此日軍令を発して曰く、

### 覚

一明日五ツ巳前にまへの河原にて先備馬

廻そなへ如書付そなへを立可申候事

一明日は逗留にて候間陣屋には人足以下

其儘おき可申候事

一 鉄砲の者并馬上持鎗一本かふとかけも  
たせ打廻り可仕候間可得其意候事

一 馬廻の幟もとは磯野右近須知主水角  
田佐伯采女相残り可申候先手ののほり  
もとは与右衛門相残り可申候付渡辺  
掃部ぬし一人相残り可申候事

一 鉄砲の者も小さし物ハのほりもとに可  
有之候鉄砲の者迄いかにもかるゝと  
仕可致供候事并勘解由組の持弓の者も  
のぼりもとに可有之候馬上の弓之者は  
可令供候事

一長柄の者何ものほり本に残り可申候事

一ほろの衆鉄砲頭不及申可致供候事

一我等さへ野陣仕候て家陣取候者以来聞

出し卑怯者に可仕候事

一組々其そなへの如く可得其意候家陣な

と取其そなへ無之者は堅曲事に可申付

候也

十月廿七日 判

馬廻衆中

之れより先き、大阪城中の軍議は、狭田宮、

仁和寺、守口の堤を截断し、榎並、大窪、焼

野の近傍に氾濫を造り、玉水、天神森等の要

地を撰みて、木津川に臨みて砦を設けんとせしが、高虎が疾く河内に入り、大和の諸将も亦相継きて至りしより、遂に之れを果さゝりき。高虎は廿八日、単騎所々の高地に馳せ上りて陣地を相し、命令を伝へて小山に陣を移さしめ、廿九日大仙陵泉和に屯す。此時將軍秀忠遠江行軍中、書を草して高虎に囑する所あり、

書状今日懸川にて令被見候路次中飛立程に思ひ候へとも大軍を召連候故はかゆき候はで令迷惑候余り遅く候間人数をは段々に申付跡より成次第にせしめていそき



候事候大略来二日三日頃には可為上着候  
間弥我々上着まで大阪御取つめ候事御待  
被成被下候様に可申上候此度之事に候間  
是非とも其方を頼候也

くり返しノ、大阪の御手たて我々上着  
候まで御待被成候様此たひの事候間其  
方頼入候御前にていくたひも可被申候  
将又佐渡は跡より上る事に候

十月廿八日 秀忠 花押

藤堂和泉守とのへ

先鋒渡辺了は住吉の陣地に在り、是より先き  
敵将新宮行朝なる者、兵百七十余人を率ゐて

堺を 鹵掠し、東軍来り逼ると聞きて城に還らんと欲し、此日黎明馳せて渡辺が陣前を過ぎしに、了、濃霧に遮られて之れを追撃すること能はず、高虎之れを遺憾として了を詰り、且家康の疑を受けんことを虞りて、誓紙を呈せり。

小山より住吉前へ御陣替被成候此時籠城の内より紀の国新宮と申す者堺の町を地焼可仕とて罷出候然処いまた早天事の外霧深く一円先見え不申候に付見合罷在候所へ高山様の先手参懸り候へ共是も霧ふかく敵味方のわかち見分け不申候処新宮

寄手と見つけ申急引取申候扱は敵にて有  
之たるとて追申候得共霧ふかく御座候て  
見え不申候に付志んぐう霧のまぎれに遁  
け済し申候 高山様殊の外御機嫌悪く御  
座候ひ軍神の血まつりに初手一番の首共  
を御上げ可被成とか様の御残多儀は無之  
大傷寒を御煩ひ被成候よりは御胸くるし  
きと御意被成候き手許迄参り候敵をのが  
し候儀両上様御疑も可有御座かと御誓紙  
を遊ばし御あげ被成候ひき私書き申候

(西島留書)

高虎公先手の者参りかゝり候へ共敵味方

見分かたくいつれの衆にて候哉と尋候へ  
は紀伊国新宮にて候と答之浅野但馬殿一  
両日の内に御出合候はんと前廉に風聞御  
座候て扱は浅野但馬殿衆にて候かと存居  
申処新宮者城中にて見なれ申さぬ人数に  
付敵と心得新宮にげ申候

(西島延宝留書)

而るに冬夏事記には次の如く、渡辺が軍略上  
の過失より、敵兵を逸したることを記せり。

…若狭守猶界津に在り…大野治房使  
を馳せて若狭守を趣加し城に入らしむ  
若狭守猶未た之を信せず徐に界津を出で

住吉の南原に至れば忽ち渡辺了の陣を見て驚き走る高虎の兵之を追撃せんと欲す了之を止めて曰く此の敵伏兵を堺津に留め我軍後を邀ふるの計なりと竟に追ふを許さず若狭守僅に遁れて城に入る時人了の機を失ふを咎む……

攝戦実録も之に同じく、日本戦史関原役にも此の説を取れり。されど西島之友は高虎の秘書として、常に其の左右に在りて、文筆に任せしなれば、其の所記には十分の信を置かざるを得ず。了が味方と信じて追はず、敵と知

りたる時は、霧に遮られて追ふも及はざるを  
覚りて止みしといふが事実なるべし。

十一月五日高虎陣を移し、住吉神社を背に  
せんとせしに、軍目付真田隠岐守信昌、横田甚  
左エ門重量、鈴木久右衛門伊直等、神社を前にすへ  
しといふ。高虎曰く此地は東に池あり、西に  
丘陵あり、而して後に松林ありて、敵我が兵  
の多寡を知り易からざるに、我の敵を制する  
は則ち易し。此の三利ありて陣を布くに、若  
し他日異論あらは高虎独り責に任すべしと。  
遂に神社を背にし、阿倍野道に面して陣す住吉に陣

を移せし時日には種々の異  
説あり今日本戦史に従ふ。

此日福島正則の家老福島丹

波が義絶の子長門といへるもの、主従二十人  
海路住吉に至り、我兵を見て城兵と誤認し、

一 道案内する。

嚮道<sup>一</sup> を乞ひしかは、之れを撃ちて尽く屠戮

二 「さら(せり)」と読む。

し、首を住吉の浜に梟<sup>二</sup>せり。是日家康、藤  
堂の兵が所在に放火し、民家を劫掠せしと聞  
き、令して之れを禁せり。こは寛永系譜に高  
虎が忍びの者を遣りて、敵地を焼ける事あり  
と記し、編年集成には、三好備中守の領地な  
る誉田附近を、藤堂隊の雑卒が侵略せしより、  
備中守は之れを家康に訴へたる事を記せり。  
放火劫掠とは是等の事実を指していふなるべ  
し。此日浅野長晟兵を率ゐて紀伊より大鳥に

至る。家康命して住吉に進ましむ。長晟乃ち高虎に面して其の傍に陣す。高山公実録には、此日敵将大野道見が天王寺を焼きて、我軍を擾さんとせしかとも、高虎は備を堅くして動かさりしことを記せり。而れとも西島留書には、『小山に御陣取の夜、天王寺を大阪より地焼仕候』として去月廿八日の事とす。日本戦史にも六日に天王寺放火の事なし、又同史に七日高虎が今在家に進みしことを記すれども、藩の諸記録には該当の記事見えず。高山公実録には十一日、高虎營を天王寺の焦墟に陣し、本田美濃守、一柳監物、古田大膳、分



部左京亮等が来り属せしと記し、日本国民史はこれを十二日の事とす。西島留書に『住吉に一夜御在陣被成翌日天王寺へ御陣替被成候』とありて、焼墟に敵の潜むこともやと、諸士皆馬を下り、槍を手にしつゝ進み入りしことを詳叙せり。されば十一日とあるは七日ならざるべからず。凡そ此の数日、進陣の時日を記すること諸書同異ありて、極めて煩はし。後考を俟つ外あらず。

此時東軍の諸隊は概大阪城を環りて布陣し、皆竹楯を備へて令の下るを待てり。高虎の天王寺に着するや、其の夜城中より銃砲を連発

せしも命中するものなし。十四日高虎書を宇和島城に送りて新七良勝を召す、十五日家康二条城を発して木津に着す。此時高虎笠置舟奉行森島新右衛門をして、浮橋を山崎に設けて家康の渡河に便せり。家康此夜木津の里長の家に宿せしが、厨下の役夫中に異色の人あるを発見せしかは、旗幟人馬を留め、自ら甲士三十五騎を従へて奈良に至りて宿す。是日秀忠河内に入りて牧方に宿す。十七日家康関屋越を住吉に至り、祠官津守某の家に入る。高虎、長晟、至鎮、利常、忠直、生駒一正、一柳直盛、松平忠明、本多忠政、古田重治等

と共に迎へて謁せしに、家康は特に高虎、利常を召し、地図を按して攻撃方面を命ず。日本戦史には高虎、直孝が此日を以て住吉より天王寺に移り陣せしことを記す。

十八時午前六時家康精兵百余騎を従へて天王寺に至れば、秀忠已に在り。共に茶臼山に登り、二重に鉄楯を張りて軍議を開く。高虎銃兵を山下に配置して護衛せしむ。家康の意見は持久策を取るに在り、高虎と本多正信とを召し、攻城の方略を議し、諸所に塹濠を掘り、土山を築きて城に逼るを命じて住吉に還る。十九日午前十時、秀忠住吉に來りて、家

康と共に図を按じて軍議し、更に高虎及本多父子等をして謀議せしめ、遂に鳥飼附近の堤を決し、新庄村の端に於て北中島の川を塞ぎ、淀川をして北流せしめ、天満口の進路を開き、船場、天王寺等の諸口と共に、総攻撃を行ふことに定め、土豚二十万を摂津、河内の二国に課す。此日生玉の城将戸田民部、銃卒を出して防戦せしかば、中堅前隊の銃将奥山五郎左エ門撃ちて之れを却く、米村勘左エ門等大砲を発して頻りに城を攻撃す。

十一月十九日公生玉の城門の向へに陣を詰寄給ふ……廿日夜前より今暁へ向て敵

城に仕寄を付土俵を以て道を付け竹束を  
段々と催合櫓を並へて堀際へ攻寄給ふ白  
昼は余り敵城より鉄砲を打出すに依て死  
傷の者もあり仕寄はか行かざる故多く夜  
分に諸士粉骨を尽す公は様々の甲冑を着  
毎夜竹束の下へ出させられ自ら下知し給  
ふによりて勢伊の諸士甚働強く諸手の攻  
口よりは格別に敵城の塀櫓の損し多く難  
なく櫓一つ打破りて此所は城中人の通ひ  
を止むと云々同晦日神君の命に依て織田  
雲生寺長頼か守る所の西南堀詰の櫓を石  
火矢大筒を以て稠しく発し打破る此節城

方の守將戸田民部少輔家政堪へ兼て城門  
を開きて既に突て出んと足輕を出し鉄砲  
を打掛たり当家の魁兵鉄砲頭残らす其機  
を察し備配りあり其内鉄砲頭四五隊足輕  
を引連て進んで鉄砲せり合あり敵突て出  
づべき勢を見て当家の若者共も我も／＼  
と持楯竹束を負んで進まんとすれ共城中  
よりの鉄砲雨の如く発する故何も猶予す  
其一町程向に小土居ありて各是を心掛小  
楯に取るへしと思へとも飛丸益頻りにて  
進み得す時に小川五郎兵衛一番に走り出  
す……

（冬陣日次）

藤堂軍は天王寺口には向ひしも、生玉口には向はすとす。説もあり。生玉口に向ひしとする説にも、其の時日に付ては諸説紛々として一定せず。二十一日秀忠は利勝、直次をして住吉に來りて稟議せしめ、家康は遂に對城の築設を命し、其の地点を天王寺、茶磨山等十二ヶ所に定む。二十五日夜人ありて浅野長晟の營に一 闖入せしかは、成卒捕へて二 訊鞠す。これは城中の使なり、乃ち之を本營に致す。家康之れを鞠訊すれば、答へて曰く、長晟、高虎太閤の旧恩を忘れずして内応を約し、酒食

を遺る、故に書信を通するなりと、其の書信  
は下の如し、

重而申遣候今度者奇特に才覚候而両御所  
此表へ引出候儀満足不過之候内々如約束  
東衆申合急度後切可被仕候本意之上国

元之

儀先日被申越通弥不可有相違候其外何に  
ても任望候委細口上に申含候謹言

十一月廿一日 秀頼 黒印

藤堂和泉守殿

家康之れを見て大に笑うて曰く、是れ極めて  
浅薄なる離間策なり、我何ぞ其の術中に陥ら



んやと。其の書と人とを高虎に与へて曰く、  
悉く手足の指を截り、額に秀頼の二字を烙印  
して城中に還し、将来を懲らすへしと。高虎  
之れに従ひ、指を截つて十二三に至れば、其  
人大に衰弱せしかは、之れを止め、額上に烙  
印し、紙旗に治房の紋を画きて其の背に挿ま  
しめ、板に載せて黒門外に捨て、城に向うて  
大に呼びしに、城中より答へて其の人を知ら  
ずといへり。されど夜に入りて 昇一き 入れし

か、翌朝之れを見れば既に所在を失せり西島留書に拠れば

此者は大野が従士吉川瀬兵衛と称するものなり 又高山公実録其他此の事件を二十一日のこととすれど、それは秀頼の書面の日付によりて云爾するなり。

今日本阪役の説。  
戦史大に従ふ

一 「か(く)」もしくは「かつ(く・ぐ)」  
と読む。二人が一緒に両手をかけて持ち  
あげること。

三十日蜂須賀至鎮、浅野晟政等陣を船場に  
進む。高虎家康の命により、織田雲生寺の守  
れる西南の楼櫓を砲撃して之れを援護す。十

二月朔 (44)、伊達政宗榎木橋に向ひしを、敵、

井楼を構へて之を射撃し、伊達軍進みかねし  
かば、高虎弓銃手を率ゐて往きて援け、仰き  
て敵を砲撃して、敵をして楼に登るを得ざら  
しめ、政宗の兵為めに其の営を保つことを得  
たり。四日暁に敵の城中失火あり、之れより  
先き城将南 条? 城中務内応の約ありしかは、松  
平忠直、前田利常、井伊直孝等の諸将誤り認  
めて信号と為し、争うて真田の出丸を攻撃せ

しが、高虎は南条の号火にあらざるを知りて進まざりき。一説に云く、南条中務の伯父隠岐、高虎と旧ありて内応を約し、柵の柱根を土中にて引切り置き、提灯を差出すを相図に、東軍の攻め入るへき手筈なりしが、陰謀発覚して南条は戮せられ、後藤又兵衛代りて其の持口を守りしに、偶城兵の誤りて火薬に発火せしめて矢倉に延焼せしを、東軍誤りて南条が信号として進撃せしに、待設けたる城兵に痛撃せられて、多くの損傷を生せりと。而れとも藩内の諸記録には、一も類似の事実を伝ふるものなし。家康諸將の妄進を怒り、直次

を遣して収兵の命を伝へしめ、午後二時茶磨山に至り、忠直の部将を召し、恣に開戦するを譴め、遂に高虎政宗の陣を巡視し、黄昏住吉に還る。此日新七良勝伊予より着陣せしかば、高虎喜びて左翼の先鋒を命ず。渡辺勘兵衛の隊は茲に於て、中備の位置に立つに至れり。五日薄暮、豊恭谷口の城将織田長頼の部兵忿闘し、一営為めに大に騷擾せしかば、藤堂良勝、渡辺了等これに乗じ、急に兵を発して攻撃し、柵を破り壁を攀ぢ、其の勢幾んど城に入らんとす。長頼の士之れを拒ぎ、兎女に至るまで瓦礫を擲ち、或は装薬を助く。長

曾我部盛親馳せ来りて射撃し、力め拒く。渡  
辺了其の手兵を以て挺進し、丸に中りて馬よ  
り落つ。秀頼急を聞き山川賢信、北川宣勝、  
井上時利等をして之れを援けしむ。而るに独  
り長頼のみは病と称して出でざりき。高虎之  
れを聞き、良勝、了等の本営の命にあらずし  
て単進し、軍令に違背するを畏れ、加ふるに  
敵の生兵大に至りて、戦況我が不利に傾かん  
とし、仮令兵を増加して良勝等を援くとも、  
終に克つへからざるを知りて、自ら軍螺を吹  
いて退却を命じ、勝を全うして兵を収めたり。  
六日家康本営を茶磨山に移す。此時に当りて

東軍は四面より城に薄り、本多忠政、有馬氏  
豊等四将は天満より、松平康重、岡部長盛は  
川崎より、片桐且元等三将は京街道より、上  
杉景勝、佐竹義宣等は今福嶋野より、浅野、  
蜂須賀、池田等四将は船場より、而して高虎  
は伊達政宗、前田利常、松平忠直、井伊直孝  
と共に城南より仕寄を附けて包囲す。東軍合  
計十八万余準備を整へて進攻の令下るを俟つ、  
八日、家康命じて外様諸将に各銀百貫目を給  
与せしが、高虎は前に糧米一万石を献せしを  
以て、特に二百貫を給せらる。九日、高虎茶  
白山の軍議に参す。此夜午後六時、同十時、

午前四時の三回、諸陣一斉に砲火を発し、城中を劫かして其の氣勢を挫く。十日正午、秀忠茶磨山に來りて家康に謁し、高虎及正信を召して軍議す。十一日家康間宮伊治、島田時直等に、礦夫を募りて城壁の下を鑿ち、樓櫓を崩壊せしむへしと命す。伊治等の意見により、高虎、直孝及利常の仕寄の前より堀鑿し、十四日より工を起す。其の法、高八尺五寸、横巾九尺にして、穴の入口両角より奥へ四尺五寸宛の間隔を以て、左右に支柱を並べ植え、貫を二段に通し、大なる梁を渡し、其の上に角柱を五通り並べ、又其の上に厚板を挿みて

天井を張る如くにし、両脇の土を擁する為め、貫と土との間に厚板を豎に置き、又穴の中通りに九尺の間隔を以て、梁に大なる柱を立つ。こは地震又は土崩に備ふるなり。而して隧道内の暗を照す為めには、両傍に灯を掛けて点火す。

冬の御陣に権現様より高山様へ被仰付金堀参り候に付其の奉行勝右衛門に被仰付昼夜の境なく堀せ申候 高山様も夜々其所へ御いで被遊候 右の土にて築山を築き井楼を上げ被遊候 金堀の所は塩屋口の御門櫓の前玉造口よりは少し西へ寄り



堀入候処に井戸の有之所□堀当て煙出候

故大阪より鉄砲稠敷打掛候へ共無難堀際

七八間迄堀付申候（梅原勝右衛門家乗）

十二日渡辺了、渡辺宗<sub>内膳</sub>等竹束をつけ寄り

て奮戦せしも、死傷多くして、敵に損傷を与ふるに至らず、高虎令して兵を収めしめ、竹束を前の位置に復せしめたり。

十二月十二日夜に入り敵の守兵騒動の体

見へしに依て渡辺勘兵衛 渡辺内膳を始

として敵の虚に乗して攻寄せ城中へ乗り

入らんとす 両渡辺か部下の侍同しく進

んで攻入らんと楯を捨て竹束を投げて堀

へ飛入らんとす 敵兵も出し櫓より鉄砲  
を打て爰を先途と防く 中尾平助 松浦  
次郎左衛門は先に進みけるが敵の為に深  
手を負んで引退く 渡辺了が騎士東野甚  
七並に同長兵衛守が臣杉谷源藤助も此時  
飛玉に当り命を殞す是をも顧ず今夜是非  
塀を乗り越えんと渡辺宗を始め其の隊下の  
騎士頻りに攻寄ける 城中より之を見て  
猿火を下し松明を投出し白昼の如くにし  
て城の塀狭間走り櫓より鉄砲を指付け打  
出すに依て岸田喜右衛門飛玉の為に命を  
殞す 此場に於て関理助は七ヶ所玉疵を

得る 石田宗左衛門は是を見て駆付け退  
き 兼て理助を連れて引退く時 是も俱  
に手負ひたり 大木長右エ門も所々薄手  
を負ふ 渡辺掃部か部下渡辺八左エ門島  
川専助等働あり 公は折節神君の本營に  
候し給ふによりて 渡辺勘兵衛此事を嫡  
子長兵衛並に青木忠兵衛を以て是を注進  
す 公則ち駆帰りたまひ此体を見て怒ら  
せられ公儀よりも力攻の儀を再三制禁せ  
らるゝ処に斯の如きの次第軍法を背くこ  
と言語道断なりとて諸士を引揚らる……  
……猶此節も城中より砲玉を発すること

雨の降る如し 安波伝左衛門は深手を負  
んて引退きしが 日あらずして卒す其外  
渡辺了を始め薄手を負ひし者は若干なり

(冬陣日次)

抑も大阪城の地勢たる、三方天險、敵軍を  
阻するも、独り南方は高地を以て城に連なり、  
空濠を以て之れを阻絶するのみ。秀吉之れが  
為めに苦心し、身を終るまで以て念とせりと  
いふ。此の役に真田幸村が出丸を築きしも亦  
畢竟之れか為めなり。又三の丸の南面に三門  
を開き、西端なるを松屋町口とし、其の次を  
谷町口、其の東を八町目口とし、共に路を天

王寺に通す。真田の出丸は八町目口の東、即ち城の東南端に在りて要害最も厳しく、到底力強すべからず。前田利常等之れに対して陣し、井伊直孝等は八町口に、伊達政宗は松屋町口に、而して高虎は谷町口に対す。家康諸將に命じて皆竹盾を付けしむ。其の竹盾は長さ八尺、高さ四尺、士一人に付一盾を備へ、漸次に之れを進めて空濠を距る僅に二三十間に及び、尚進めて濠側に薄り、土山を築きて其の上より城中を瞰射す。城中も亦土豚を積みて障壁と為し、弾薬を惜まずして射撃すること雨の如く、これが為め東軍には死傷多く

して、毎營三百或は五百に至りしも、城兵に  
は一の死傷なく、唯銃痕を障壁に印するのみ  
なりき。而も高虎の士善く闘ひて射撃頗る巧  
妙なりき。

大阪冬御陣の刻石火矢御打たせ可被遊と  
御供に被召連大阪にて并楼組立て石火矢  
にて御城中に立居申候吹貫打折御堀へ落  
申候へハ高山様御機嫌に被為思日中には  
なるまじく候間夜に入り何卒御取らせ被  
遊度との御意の処城中より手を碎き日中  
に取上申候由 其刻尾張大納言様御覽被  
遊候由 其後台徳院様上意にて高山様へ

被仰付鉄砲の薬方指上申候

(米村勘左エ門家乗)

攻撃は此くの如く困難なりしが、家康の胸中には夙に成竹ありて、早く已に十月中より講和の手段を執りしが、十二月十四日高虎を茶臼山の本營に招きて謀る所あり、十六日砲術に巧なる者数十人を選抜し、南は高虎、忠直の陣地より、北は備前島より城中を射撃せしむ。其の弾丸天守閣の柱を撃砕し、閣為めに西に傾く。且其の一丸千疊敷に命中し、婦女周章股栗して悲泣せしかは、淀君の心大に動き、織田有楽、大野治長を召して、和議を

秀頼に勧めしむ。此日秀忠茶臼山に家康に会  
見し、正信、正純、高虎と媾和の事を議し、  
阿茶局を城中に遣はして常高院に説かしめ、  
二十日に至りて和成る。此夜高虎柵に乗りて  
城を破らんとせしが、媾和成立の報を聞きて  
止めり。

極月廿日の夜半時分石火矢つるへ鉄砲を  
打かけ喊の声を揚げ其の紛れに柵の根を  
切り綱をつけ御引取可被成と被仰合候  
此儀仁右衛門勘兵衛に御隠し被成候へ共  
両人も承りつけ両人を御出し抜き候段如  
何に奉存候両人御だし抜き候上は柵を抜



き候計りにては嬉しくも無之候間高山様  
柵を御ぬき被成候は、仁右衛門勘兵衛は  
乗り可申と申合たる由に御座候然る処廿  
日の宵に御嘸なり申候よし御触御座候に  
付柵御引被成候事も止み申候 其夜柵御  
ぬき被成候は、仁右衛門勘兵衛乗り申に  
て可有御座候哉御法度御破り被成候にな  
り可申に危ふき事にて御座候つると後申  
たる事に御座候  
(西島留書)

二十五日政宗、高虎と図り、井伊、蜂須賀、  
前田以下十人の賛同を得て、此際に於て大阪  
を亡滅せしむるの得策なるを進言す。■  
家

(44)

康聴かず。此日、家康二条城に向ふ。発するに臨み高虎に時衣白銀を賜ふ。又諸大名に今回戦役の労苦を慰する為め、三ヶ年公役普請を免除する旨を伝ふ。斯くて家康は諸将の所領石高に応して夫役を出さしめて、塹濠壊平工事を起し、諸将其の功を急ぎしかば、翌元和元年一月十九日には惣構は勿論、二三の丸をも破却し、堀をも埋め終る。此の工事中菅有直高虎の怒に触れて自尽し、細井主殿は去る。

堀うめ普請の時早朝に高山様御普請場へ御出被成候処物頭衆一人も居不申候に付

御機嫌悪しく御帰被成御膳あがり追付亦  
御出被成候其時に何れも物頭衆御普請場  
に相詰居申候片端より御叱り被成御通り  
被成候 菅平右衛門をも御志かり被成候  
へは口答へ仕候高山様御腰物を抜かせら  
れ平右衛門に御打つけ被成候はんと遊し  
候処野崎新平平右衛門立候へと申候て後  
より抱き立申候を御覧被成御腰物を御取  
直しむねにて御打被成候夫より藤堂勘解  
由同馬乗の弓の衆母衣の衆御つけ被成平  
右衛門切腹被仰付候様子色々のこと御座  
候ひき細なる儀は略仕候 (西島留書)

冬陣菅平右衛門御呵の事あり御答も悪し  
く御立腹にて腰抜と被仰平右衛門居直り  
私の腰のぬけたるをいつ御覧ありしと云  
ふ脇差サヤトモニ前へ  
抜にルニヤ原註さし込けり 其時主に対  
し脇差に手を懸ること慮外なりと御意に  
て切腹被仰付此時勘兵衛申上候は物前な  
れはか様の者御救免可然と御異見申上候  
慮外者を鼻肩仕候哉と夫より少々御間有  
之

(秘覚集)

正月十九日秀忠伏見に徙る。発するに臨み高  
虎を召して、懇命する所ありて物を賜ふ。高  
虎二十四日陣を撤して帰邑の途に就く。

### 3 粉川城趾

粉川は天正十五年八月より文祿四年六月迄十年に亘りて、高虎が居城たりし地なり。其の間高虎は多事にして帰休の日とはなく、公務の為め多くは外に在りて、郡山城は勿論、山城国槇島及木幡郷六地蔵にも邸宅を有せしといへば、粉川城に在りし日としては数ふるに足らざりし程なるへし。されど紀泉一部要地の鎮護としての兵員を茲に駐屯し、父虎高を始め家族を居住せしめたる本拠の地として、時々帰り来りて軍国の事務を視しことは言ふ迄もなし。抑も粉川は紀伊国那賀郡の主府た

※この項目は第1巻の続きと考えられるが、底本では第4巻の末尾に綴じられているため、ここに掲載する。

り。那賀郡の地勢たる、和泉国に接して伊都、  
名草の両軍に夾まれ、紀ノ川之れを貫流して  
沿岸に沃地を有し、川南の過半は高野領に属  
せり。川北の支流粉川の岸に粉川荘十四ヶ村  
ありて、土地平広、最も農作に適す。其中  
央、伊勢街道の要衝、四方輻湊一の地に粉川町  
ありて和歌山を距ること六里二十八町、商業  
の盛なること郡中の第一位を占め、古来金工  
の名匠を出し、又刀工に国次を出せり。高虎  
の城址に付て『紀伊続風土記』に記して云く、

粉河村中より東粉河寺境内猿岡山といふ

にあり 城跡東西一町 南北四十間許

慶長の頃藤堂大学頭居城の跡といひ伝ふ

明和年中粉河寺より其地に秋葉権現を

祀る……

と。慶長といひ大学頭といふは杜撰も亦甚し  
と雖も、其の高虎の城跡たることは疑なし。

粉川寺補陀落山  
願成就院は此の近傍に在りて、三十三番札

所の第三番として巡拝者多く、因て以て粉川  
城市が殷賑の一半を支持せしが、其の護衛兵  
たる『方衆』が秀吉に反抗せし為め、天正十  
三年の紀州征伐軍に討平せられ、五百有余の  
堂宇を挙げて焦土に歸せり。今の堂塔は其の  
後の再建にして稍旧形に復し、寺院境内方二



町に涉ると云ふ。根来寺は粉川の西北山間に在り、覺鑿上人が高野より分離して、新義真言を主張すべく建立せし浄刹なれど、足利氏の季世よりは、僧徒兵仗を帯んで掠奪を事とし、四隣を懼れ伏せしめて数十万石の地を横領するに至れり。秀吉は特に真田幸村を使者として、新に二万石を給すべければ、横領地は全部返納すべしと諭さしめしも、僧徒倔強にして肯はさりしかば、秀吉激怒して大挙討伐を加へ、伽藍堂塔を焼き衆徒を誅伐して之れを掃蕩せり。高虎が其の先鋒として屢勇戦し、遂に進んで熊野の奥地に攻め入り、地方

豪族の根来僧徒と氣脈を通せる者を討滅すること、疾風の枯稿を掃ふが如く、遂に紀州全国を統一して、畿甸の病根を除きしことは既記の如し。高虎は因て采地を根来の本拠たる那賀郡に受け、粉河の要地に居城を構へて、之れが鎮圧と懐柔とに任せしが、其の多く外に在るの日に於ける留守事務の総ては、父虎高之れが統宰の任に当り、士民の心服を得て能く藩鎮の責任を全うせしかば、高虎は毫も後顧の患なくして力を外部の任務に専にすることを得たりき。